博士学位論文審査要旨

２０２０年1月１８日

論文題目：　日本人初級英語学習者の主題卓越型構造の転移に関する研究
—主語・述語の産出プロセスの解明に向けて—

学位申請者:　橋尾晋平

審査委員：
主　査：　文化情報学研究科　教授　山内　信幸
副　査：　文化情報学研究科　教授　川﨑　廣吉
副　査：　文化情報学研究科　教授　金　　明哲
副　査：　文化情報学研究科　教授　田口　哲也
副　査：　名古屋外国語大学外国語学部　教授　田地野　彰

要　　旨：

日本人初級英語学習者の文産出において、母語である日本語が転移したと考えられる非文法的・非機能的な英文がしばしば観察される。「主題＋解説」の構造の日本語が母語である日本人初級英語学習者にとって、英語の「主語＋述語」の構造を習得するのは難しいとされ、また、日本語からの転移という現象は、検定教科書や日本人英語教員などの教授者側の問題とも関連があると考えられる。

本論文では、日本語の主題卓越型構造が反映された文が初級英語学習者の主語・述語の産出にどのような影響を与えるのかに関する２種類の調査を行った。１つ目の調査では、日本語の基本語順 SOV の文とその文が変形してできた主題をもつ文を与え、それぞれの文を協力者がどのように英語で表現するかを検討した。また、２つ目の調査では、さまざまな主題卓越型構造が反映された日本語文を準備し、どの特徴が協力者の文産出を最も困難にするかについても分析した。その結果、初級英語学習者の文産出を特に困難にするのは、これまで言及されているような「は」のマークの影響というよりはむしろ、主題が前置されることと述語が代用化されることであることが判明した。

また、本論文では、意味を重視した英語指導法に基づき、日英語の違いを明示的に指導し、日本語の構文別に文産出の訓練を行う独自の指導法を提案した。さらに、その指導を学位申請者の勤務校の担当クラスにおいて実践し、日本人初級英語学習者の転移の問題の克服を試みた。その結果、授業実践を受けた初級英語学習者は、英語の主語にあたる要素が文頭に置かれていない日本語文についても英語で正しく表現できるようになり、初級英語学習者の主語・述語の産出に関する能力を向上させる有意な結果が得られ、その学習効果が示された。

本論文により、日本人初級英語学習者の文産出において、母語である日本語が関わる転移現象の解明とその克服に向けた適切な教授法の提案の妥当性が提示されたことにより、データサイエンスの手法を援用し、主語・述語の産出プロセスに関する新たな知見の発掘に十分な貢献を果たした。

よって、本論文は、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０２０年1月１８日

論 文 題 目：　日本人初級英語学習者の主題卓越型構造の転移に関する研究
—主語・述語の産出プロセスの解明に向けて—

学位申請者：　橋尾晋平

審査委員：
主　査：　文化情報学研究科　教授　山内　信幸
副　査：　文化情報学研究科　教授　川﨑　廣吉
副　査：　文化情報学研究科　教授　金　　明哲
副　査：　文化情報学研究科　教授　田口　哲也
副　査：　名古屋外国語大学外国語学部　教授　田地野　彰

要　　旨：

学位申請者は、2016年度4月より本学大学院文化情報学研究科博士後期課程に在学しており、国内会議および国際会議での研究発表を通じて、精力的な研究活動を行い、それらの研究成果を、著書2本、国際学術雑誌（査読付）に1本、関連学会論文誌（査読付）に7本、関連学会論文誌（査読なし：依頼原稿）に2本の論文として公刊している。また、海外の関連学会で研究発表5件を行い、研究論文1本が掲載されていることに加えて、研究発表も国内外で合わせて27件を行っている。英語の語学試験にも合格していることから、語学（英語）について十分な能力を有していると認定されている。

2020年1月18日（土）13:00から夢告館312号室にて、約60分の公聴会と30分の審査会ならびに審査委員全員による評価の最終確認を行った。博士論文全般の内容と関連領域に関する質疑に対して、学位申請者は的確な応答を行い、当該分野ならびに関連領域における知識と理解を有していることを示した。従来の言語学的・英語教育学的な知見に対して、データサイエンスの手法を援用して、精緻な分析を行ったことは十分に評価できる。よって、博士（文化情報学）（同志社大学）の学位を授与するに十分な学力を有することを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：日本人初級英語学習者の主題卓越型構造の転移に関する研究
—主語・述語の産出プロセスの解明に向けて—

氏　　名：　橋尾　晋平

要　　旨：

大学英語教育において、習熟度にかかわらず、円滑なコミュニケーション活動を行うことが推奨されているなか、現状に鑑みると、初級レベルの英語学習者が無理なく英語でプレゼンテーションやディベートに取り組むことができるような指導法の考案・開発が喫緊の課題とされている。従来から、何らかのテーマについて自分の情報、考えや意見を述べるコミュニケーション活動を含むスピーキングの授業では、「～は」から始まる日本語文を発想した場合に、非文法的・非機能的な英文がしばしば観察され、このことは、「～は」から始まる文が基本形の日本語の主題を含む文からの転移が一因であると考えられてきた。主題とは、文中で解説される対象Xのことで、日本語では、提題助詞「は」をとって現れるとともに、文頭の位置を占め、この主題の働きにより、日本語の基本語順SOVが変形させられた文が生じる。本論文では、「～は」から始まる日本語文のどのような特徴が英語初級学習者の英語の文産出、特に、主語・述語の産出を困難にするのか、また、そのような文を英語で表現する場合、主語・述語を正確に産出できるようになるために、検定教科書や日本人英語教員など教授者側の問題も考慮に入れつつ、どのような指導法が最適なのかについての分析・考察を行った。

まず、はじめにでは、研究目的と各章の内容について述べ、3つの研究課題を設定した。それぞれの研究課題については、第4章～第7章で提示する調査や授業実践をとおして解決を図ることを述べた。

第1章では、初級英語学習者とコミュニケーション能力の定義を与え、コミュニケーション能力の下位能力である文法能力の指導が英語教育の中でどのように位置づけられているのかを概観した。また、初級英語学習者に向けてコミュニケーション活動の授業を行う場合の必要な視点を整理しつつ、筆者が勤務校で導入している初級英語学習者向けのディベートの授業の取り組みを紹介し、そこから得られた初級英語学習者の文法能力・文産出の課題を抽出した。

第2章では、まず、第二言語習得理論の先行研究を概観し、母語の外国語の学習における位置づけの変遷をまとめた。これらの先行研究が示すように、転移は習熟度が低い学習者ほど母語の知識に依存しやすいため、母語のある項目と対応する目標言語の項目が類似していると学習者が判断した場合に転移が生じること、また、学習者の目標言語の知識が不足していることにより、母語に頼らざるをえない場合に転移が生じることを確認した。

次に、日本語学の先行研究を整理し、日本語の主題卓越型構造が反映された構文とその特徴を扱い、初級英語学習者が日本語の「主題＋解説」の構造と英語の「主語＋述語」の構造を同一視することで生じる転移に関する第二言語習得理論・英語教育学の先行研究をまとめた。先行研究によると、日本語の主題卓越型構造が反映された文の特徴として、(i) 主題が文頭に置かれること、(ii) 主題が提題助詞「は」にマークされること、(iii) 空主語が認められること、(iv) 二重主語構造をとること、(v) 述語が代用化されることが挙げられ、これらの特徴が日本人初級英語学習者に転移し、英語の文産出を困難にしていることを指摘した。

第3章では、このような転移をどのように克服するかについて、現状でなされている提案や実践例を紹介した。転移を克服するためには、母語と目標言語の違いについての「気づき」を促す

ことが重要であり、また、日本語と英語を対照して学習するためには、無意識になっている日本語の知識を意識化させることと英語の基本語順を身につけさせることが肝要であると主張した。ただし、習熟度の低い初級英語学習者に対して、主語や目的語などのような文法用語を過度に使用した説明を行うことは、初級英語学習者への負荷が大きいため、文法用語を極力避けた指導が求められることも指摘した。

また、本論文では、教員の誤った説明、教科書をはじめとする教材や提示上の不備も初級英語学習者の文法能力の養成を阻害すると考えており、第3章の後半では、中学英語・高校英語の検定教科書を質的に分析し、英語の「主語＋述語」構造を習得するうえで障害となりうる記述がなされていることを指摘した。さらに、日本語の特徴や日英語の違いについては、英語の検定教科書のみならず、国語の検定教科書においても取り扱われていないことも問題であると主張した。

第4章では、日本人英語教員に対するアンケート調査を実施し、日本人英語教員が主語・主題という概念や日英語の違いをどのように認識しているのかなどを調査した。その結果、英語運用能力が高い日本人英語教員であっても、主語と主題を混同してしまっていることが示された。また、ライティングやスピーキングの授業において、学習者が日本語の影響を受けた誤りをしてしまう場合、その誤りを克服するためにどのような指導を行うべきかについても決定的な指導法が確立されていないことも明らかになった。さらに、このような教授者側の問題が、初級英語学習者の理解の阻害要因となってしまっている可能性も指摘した。

第5章・第6章では、日本語の主題卓越型構造が反映された文が初級英語学習者の主語・述語の産出にどのような影響を与えるのかに関する調査を行った。ここで重要な概念として、基本語順の文のある名詞句Xに焦点があてられ、Xが文頭に移動し、提題助詞にマークされる一連の操作である「主題化」と、「主題＋解説」の構造によって、述語が「だ」に置き換わり、削除される操作である「述語代用化」を挙げた。第5章では、(i) ～ (iv) のような主題化の操作や (v) のような述語代用化の操作が行われる前段階の基本語順に基づく文と (i) ～ (v) のような主題化・代用化の操作が行われた後段階の日本語文を準備し、それぞれの文を初級英語学習者がどのように英語で表現するかを検討した。また、第6章では、追加の調査として、(i) ～ (v) の特徴を含んでいる日本語文を準備し、どの特徴が初級英語学習者の文産出を最も困難にするかについても分析した。

2つの調査の結果、初級英語学習者の文産出を困難にさせるのは、(i) と (v) の特徴であることが判明した。(i)・(ii) については、これまで言及されているような「は」にマークされるという主題の形態的な側面が影響しているというよりは、主題となる名詞句が文頭に置かれる文法的な側面が主語・述語の産出に影響を及ぼすことが明らかになった。このことは、多くの初級英語学習者に格助詞「が」にマークされている名詞句が文中に置かれている文を与えても、彼らは文頭に置かれている名詞句の方を主語であると判断したことからも示され、また、このことにより、(iii) の初級英語学習者への影響は相対的に小さいことが導かれた。さらに、(iv) の二重主語文「XはYがZ」は、英語で表現するのは難しいものの、所有格などの修飾に関する英語表現が定着していないため、主題化の操作が行われる前の日本語文も英語で表現するのが難しいことがわかり、主題からの転移だけでなく、発達上の誤りも考慮して指導する必要があることを主張した。一方で、XとYの関係とXとZの関係について、初級英語学習者がイメージできるかどうかが重要であるということも指摘した。最後に、(v) の述語代用が生じた文については、述語が表示されている文に比べると、代用化されている文は英語で表現する難易度が上昇することが示された。代用化されている述語が初級英語学習者にとって身近でなければ、英語で表現する場合の難易度はさらに上がる可能性も指摘した。

第7章では、教授者側の問題点と学習者側の問題を踏まえて、主題化がなされる文、二重主語文、述語代用が生じた文のように、日本語文をいくつかのタイプに分類して、これらの文が英語の「主語＋述語」の文とどのように異なるのかを明示的に教示し、英語でこれらの文を表現する

訓練を行う独自の指導法を提案し、約 4 ヶ月間、筆者の勤務校の担当クラスにおいて実践した。この指導法は、プレゼンテーションやディベートを英語で行う初級英語学習者のクラスの授業の一部に組みこみ、実際のコミュニケーション活動で生じる転移の問題を克服するという趣旨で実施した。また、明示的に指導する日英語の違いを視覚化するために、田地野（2008）が提案した「意味順指導法」の方法論を援用した。スピーキングの授業において、授業実践を受けた学生とそうでない学生に対してプレテストとポストテストを行った結果、授業実践を受けた初級英語学習者は、英語の主語にあたる要素が文頭に置かれていない日本語文についても英語で表現できるようになり、初級英語学習者の主語・述語の産出に関する能力を向上させる有意な結果が得られ、その実効性が強化されたと主張した。

最後に、おわりにでは、結論として、設定した 3 つの研究課題の成果を踏まえて、第二言語習得理論・英語教育学に対して本論文が果たした貢献とそれぞれの研究領域における今後の課題について言及した。